

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

何を今ごろと言われそうだが、いわゆる若者言葉で、ヤバイという言葉の意味を聞いたときは正直おどろいた。私たちが使ってきたニュアンスとはまったく逆。「あの試験どうもヤバイなあ」と言えば、落っこちそうだということだったはず。いつの間にか「このコーヒー、めっちゃヤバイ」がすごくうまいというニュアンスになっていた。

言葉が時代とともに変わっていくのは、やむをえないことであり、とどめようもないところがある。いまとなつては「らぬき言葉」が「葉」の注¹是非をうんぬんすること自体、どこか間がぬけていると感じるほどに、わずか二十年ほどのあいだに「らぬき言葉」が一般化してしまった。

私自身はいまもはかない抵抗を続けていて、どうしても「見れる」とか「食べれる」などの「らぬき言葉」は使えないし、使うつもりもないが、若者たちの「ヤバイ」にはそれとはちがった違和感と危惧を注²注³いだいている。「ヤバイ」が「うまい」「おもしろい」「かつこいい」「すてきだ」「気持ちいい」など、本来かなりニュアンスのちがった感覚、感情をすべてひっくるめて一語で代弁してしまうというところにまず引かかるとは。

ある感動を表現するとき、たとえば「good!」一語ですませてしまうのではなく、そこにニュアンスの異なったさまざまな表現があること自体が、文化なのである。「うまい」にしても、「おいしい」「まるやかだ」「コクがある」「とろけるようだ」などなど、どのように「うまい」かを表すために、私たちの先人はさまざまに表現をくふうしてきた。それが文化であり、民族の豊かさである。

いつも、もってまわった高級な表現を使えというのではまったくないが、必要に応じて、自分自身が持ったはずの「感じ」を自分自身の言葉で表現する、そんな機会は、人生において必ずおとずれるはずである。そんなときのために、私たちはふだんは使わなくともさまざまな語いを用意しているのである。語いは自然に増えるものではなく、読書をはじめとするさまざまな経験のなかでつちかわれていくものである。ひよっとしたら一生に一度しか使われないかもしれないけれど、それを覚悟で一つの語いを自分のなかにためこんでおくことが、生活の豊かさでもあるはずなのだ。

すべてが「ヤバイ」という注⁴符丁ふちようですんでしまう世界は、便利で④コウリツかうりつがいいかもしれないが、その便利さに⑤^ナれていてしまうことは、実はきわめてうすい文化的土壌せじようの上に種々の種をまくことに等しいのであるかもしれない。

もう一つおどろくのは、若者たちのメールを打つ早さ。打てばひびくようにケータイでメールを返しているさまには⑥カンシンかんしんする。

実際は、かれらといえども返事をすべて打っているわけではないらしい。「あ」と打てば「ありがとう」と、「ま」と打てば、「また今度」と変換へんかんされるらしい。これを予測変換機能という。

この機能はすこぶる便利で早いですが、これだけでメールをやり取りしていたのでは、用を足すだけで、会話にはならない。いわばおうむ返しおうむがしの対話が、ケータイのショートメールをかいしたコミュニケーションの大部分をしめているらしい。

コミュニケーションという言葉は、本来ちがう価値観かちかんを持っていた人間同士が、価値観のちがいをまず認識にんしきし、それを共有するということに⑦ゴゲンごげんがある。最初から同じ価値観と言葉で用が足りている仲間うちでは、そもそもコミュニケーションという言葉は意味をなさない。

本来自分という存在は、人とちがうから自分なのであって、人とまったく同じであれば、自己という存在は意味がなくなる。そのちがうということをおたがいおたがいに大切にするには、あいづちや共感や符丁ふていだけですましているわけにはいかなくなるだろう。人たちがうことに違和感をいただき、できるだけ同じになろうとするのではなく、人とちがうところにこそ、自分という存在の意味があることをもう一度思い出しておきたい。

ところが、⑧だれでも小さな世界で、常に他人と接触せつじよくせざるをえない状況じょうきようでは、いつもいつも他人とのざらざらした違和感の中なかにはなかなかなたえられないものだ。できれば心やすらかに、あなたと私は同じであるということに、安心をしていた。だから言葉の違和感をきらうのである。ヤバイの意味が本来のマズイ、危険だ、であつてもらつてはこまるし、それが理解できない人間にはできれば自分たちの輪の中なかにはいてほしくない。注⁵排他的はいたてきにならざるをえない。

仲間うちでしか通用しない言葉に依存いぞんしていると、そのなかにいる間はこちよく安心していられるが、外の世界へ出ることに

恐怖^{きょうふ}を覚えて消極的になる。気心の知れた、同じ価値観を持つ仲間うちから、外の世界へ出ていくことをためらう。逆に、固定した仲間とだけは心たのしく過ごすことができるが、その安心の輪のなかに、異分子が混入してくることを極端^{きょくたん}におそれるようになっていく。⑨ここに大きな問題がひそんでいよう。いじめの⑩コウゾウの典型的なパターンである。

青春と呼ばれる若い時期には、何も言わなくても心が通じ合えるような友人を得ることは大切だが、自分とは考え方も感性もまったくちがう友人にめぐりあうことは、それにおとらず大切なことである。自分では気づいていなかった自分の別の面を教えられるということにおいて大切な存在なのである。友人を通して、自分を^{注6}相対化して見る視線^{かくけん}を獲得する。それが若い時代の友人の意味である。

『知の体力』永田和弘

注1 是非・・・正しいことと正しくないこと。

注2 違和感・・・しっくりしない感じ。

注3 危惧・・・不安。

注4 符丁・・・仲間にはわからないような言葉。

注5 排他的・・・自分の仲間以外の人や、ちがう考え方を受け入れようとしない。

注6 相対・・・他のものとの関係で、そのものが成り立っていること。

問一 — 部①「やむをえないこと」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 必ずそうなることが決まっていること イ しかたがないこと ウ 望まれていること

エ 必要とされていること オ 否定すべきこと

問二 — 部②「若者たちの『ヤバイ』にはそれとはちがった違和感と危惧をいんでいる」とありますが、筆者は「ヤバイ」のどこに「違和感と危惧」をいんでいるのですか。文中から四十五字以上五十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問三 — 部③「そんなとき」とはどのようなときですか。解答らんには合うように、文中から三十字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 — 部④・⑤・⑥・⑦・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問五 私たちにとつて、どのようにすることが「文化」であり「豊かさ」であると筆者は考えていますか。文中の言葉を使って七十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 — 部⑧「だれでも小さな世界で、常に他人と接触せざるをえない状況では、いつもいつも他人とのざらざらした違和感の中にいることにはなかなかたえられないものだ」とありますが、筆者は「違和感」をいやくことについてどのように考えていますか。それを説明した次の文の 部に当てはまる言葉を、文中から二十五字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

人どちらがうことに違和感を覚えながらも、 ことを常に自覚すべきだと考えている。

問七 — 部⑨「ここに大きな問題がひそんでいよう」とありますが、筆者はどのようなことが問題だと言っていますか。文中の言葉を使って二十字以内で二つ書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 若い時期の友人は、どのような意味で大切だと筆者は言っていますか。文中の言葉を使って六十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 この文章にテーマをつけるとしたら、どれが最も適当ですか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア コミュニケーションの必要性
- イ それらしい言葉のうそくささ
- ウ 価値観のちがいを大切にする
- エ 自分で自分を評価しない
- オ 言葉は思いを伝える

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈小学六年生の真人は、親の仕事の都合でオーストラリアに引っ越してきた。言葉や文化の違いに苦しむ真人だったが、学校の劇に出演し大歓声をあげたことで、初めて自分の存在が認められたと思い、喜びをおぼえていた。〉

決められた学校へ行かなきゃならない子が半分くらい。どこのハイスクールに行くかは、親が決めることが多いから。でも、残りの半分は自分で決める。ぼくが、そうだ。

土曜か日曜になると、六年生のほとんどの子がハイスクールのオーブンデーっていう学校見学とか入学説明会みたいなに出かけているらしい、ということによく気がついたのは、冬がおわりかけていたときのことだった。こっちは小学校を卒業したら、六年制のセカンダリーカレッジとかハイスクールとか呼ばれる学校へ進学する。クラスの半分くらいは、来年、地元のオーチャード・クリーク・ハイスクールに行くみたいだけど、残りの半分はこの私立に決まったかっていう話で①もちきりになっている。ケルヴィンはもうとつこのむかしに、なんとかグラマースクールっていうところに決まっていた。ケルヴィンのお兄さんはケルヴィンより五歳年上の十一年生で、その②キシユクシヤに入ってるんだって言った。なんでもそこは男ばかりらしい。ノアは公立のオーチャード・クリーク・ハイ。彼のお父さんも、おじいさんも、そこに通ったんだって言った。公立でも私立でも、願書を提出するだけいいところ、試験を受けなきゃならないところ、推薦状があるところ、たくさんお金がいるところっているらしいけど、ぼくには関係ないや、って思ってた。こっちの小学校を卒業したら、東京だから、って。

この土曜日はラッキーなことに補習校は休みだった。中等部の③モシがあるからだ。ぼくはこの日、④お父さんにはじめてウソをつく。

「ジェイクと遊んでくる」

「あんまり遅くなるなよ」

こつちの人みたいにつばの広い帽子をかぶって、お父さんは前庭の芝生を刈っていた。同じ会社のオーストラリア人が薦めてくれたメーカーの芝刈り機を買ったのが少し前。それ以来、お父さんは休みの日には必ず庭の芝生を刈る。家の大家さんは、ぼくたちが来てから庭がきれいになったって喜んでる。

〈担任のオキーフ先生の薦めで、真人はひとり、ワトソン・カレッジへと向かった。ワトソン・カレッジはオープンデーで、すでに大勢の人でにぎわっていた。一人が入っていく勇気がなく、ホールの前でもじもじしていた真人に、男の人が声をかけてきた。〉

「マット？」

ぼくはうなずく。⑤、がっちりと握手をされて、私がアレキサンダー・キャンベルだ、マイク・オキーフの友だちだ、と自己紹介されたので、ぼくも、マットです、って自己紹介。ぼくのために取っておいてくれた席に案内されて、ぼくはひとりだけ時間半ほどのミュージカルをみる。ここにケルヴィンがいたらなあ、って思う。これだったら、ピアノも「ご飯食べるのとか、着がえるのとか、歯みがきするのとかと同じ」じゃなくなると思う。劇と音楽が一緒になっていて、ときどき何言ってるのかわかんなかったけど、マジすごかった。ぶっ飛びそうになった。ハンパない。あれが、ぼくとそんなに年の変わらない、ハイスクールの生徒だなんて、とても信じられない。めっちゃめっちゃ歌がうまい。歌いながらステージを飛び回って、息も切らさないうでポーズを決めている。衣装も照明もステージもシアターそのもの。ステージのスポットライトをひとりじめにしている男の人が、オーケストラの曲に乗せて歌って踊る。注スタンディング・オベーション。拍手。口笛。魔法はステージの人だけじゃなくって、お客さんにもかかるってことがわかった。ああ、ほんとにすごいや……。ミュージカルが終わっても、しばらくぼーっとしてしまった。お客さんが席を立ちだした頃、キャンベル先生がやってくる。ぼくのとかなりの席に座った。

「マイクからきいたけど、劇に出たいんだって？」

「出たい！ でも、ぼく……」

「でも？ ぼく？」

きよろきよろとよく動く⑥シドリイロの目が、ぼくのあちこちを見て、なにかを探し回っていた。

「ぼく、なんにも、できない。ぼくは、だめなんだ」

勉強もできないし、英語もまだ笑われるし、漢字も忘れかけてるし、いつも校長室に呼ばれてるし、サッカーもできないし、ポニーにもひとりでのれないし、ピアノも弾けないし、なんにも、なんにもできない。ぼくは、だめなんだ。今まで胸の泥沼に沈めておいたことが急に浮かび上がってきて、泥人形のぼくは、しゃべりだしたらとまらなくなった。ホールに残されたスポットライトがぼくらふたりの背中を照らしていた。グズグズと⑦ハナミズが出てきて、目から出た水といっしょにぼくはパーカーの裾でぬぐった。

「⑧だったら、きみをあの舞台に立たせるわけにはいかないぞ！」

キャンベル先生のどなり声をして、ハナミズも涙もひっこんでしまう。

「マツト。いま、ここで、私に約束しなさい。ぼくはだめだなんて二度と口にしないこと。だめな人間なんて、私の知る限り、この世にひとりもない。言葉っていうのは、ウソのことでもホントのことに変える恐ろしい力があるんだよ。いいかい、マツト。並みの人間にできないことやずば抜けた能力のことを、世間では才能と呼ぶ。⑨しかし、私はそればかりだとは思わない。それが証拠に、きみはたつたいま、きみにしかできない、すごいことをやってのけているじゃないか」

キャンベル先生の言葉が雪崩のようにぼくに押しよせてきた。詰めよるようにしてぼくにさらに体を近づける。顔が真っ赤。ぼくは、この人に自分のことを全部見られているような気がして、怖くなって逃げ出したくなった。キャンベル先生が力強い両手でぼくの肩をしっかりとつかむ。

「きみが、いま、ここにいる、生きてるっていうことだよ。生きてること、生かされていることをあたりまえだと思っ

けない。きみが今日生きてここにいることは奇跡^{きせき}で、それこそが、人間の持つ最大の才能だと私は信じる。ステージでは、きみと
いう人間がしつかりいなければきみ以外の者にはなれないし、自分をだめだなんて思っている人間にそれは任せられない」

約束できるかい？ さつき、私が言ったこと。二度と口にしてはいけない。二度とだ。ぼくだけを見ているまっすぐなまなざし
に、ぼくは泣いたことが急に恥^はずかしくなる。そして先生の言った通りのことをくり返して^⑩約束する。

「よし。いまから、いつでもこのステージにあがってよし。おめでどう。きみはもう私たちの仲間だ。お祝いに、カフェテリアの
ソフトクリームを食べないか？ 何の味が好きだ？」

キャンベル先生はカフェテリアに向かう途中^{とちゆう}、ぼくにキャンパスを見せてあげるって一緒にひとまわりしてくれたけど、道に迷
って元のホールに戻るまでに^⑪一苦労した。自分の学校で迷子になるなんて、ちよつとへんな先生かもしれない。カフェテリアで
キャラメル味のソフトクリームをごちそうしてくれた。食べている途中で先生の携帯^{けいたい}が鳴って、午後の開演時間だったとあわてふ
ためいた。ヒゲに白いクリームをつけたまま、^⑫じや、また会えるのを楽しみにしているよって、ぼくともういちど握手をしてホ
ールに引き返していった。

注 スタンディング・オベーション・・・観客が立ち上がって拍手を送ること。

『Masato』岩城けん

問一 — 部①「もちきり」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ある間じゆう、色々な意見が飛びかうこと。

イ ある間じゆう、同じ話題が続くこと。

ウ ある間じゆう、大きな声で盛り上がること。

エ ある間じゆう、質問ばかりすること。

問二 — 部②・③・⑥・⑦・⑩のカタカナは漢字に直し、漢字はひらがなに直しなさい。

問三 — 部④「お父さんにはじめてウソをつく」とありますが、「ウソ」について真人はどこへ行き、何をしたのですか。文中の言葉を使って、三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問四 — 部⑤に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア だけど イ さらに ウ すると エ そのうえ オ むしろ

問五 — 部⑧「だったら、きみをあの舞台に立たせるわけにはいかないぞ!」とありますが、キャンベル先生は、なぜ真人を「舞台に立たせるわけにはいかない」と言っているのですか。その理由が具体的に述べられている一文をぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問六 — 部⑨「しかし、私はそればかりだとは思わない」とありますが、キャンベル先生が考えている「才能」という言葉のどのような意味を、文中から十二字でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問七 — 部⑩「約束する」とありますが、真人がキャンベル先生とかわした約束はどのようなものですか。文中から一文でぬき出しなさい。

問八 — 部⑫「じゃ、また会えるのを楽しみにしているよ」とありますが、真人はこの土曜日の体験とキャンベル先生とのやりとりを通して、進学先をどのように考えるようになったと想像できますか。元々の考えを明らかにした上で、五十字以上六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問九 本文の内容と合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある土曜日、真人は友だちのケルヴィンと遊んでくるとお父さんにウソをついて出かけた。
- イ アレキサンダー・キャンベル先生は真人のために席を取っておいてくれ、一緒に劇を鑑賞した。
- ウ 六年生の冬になって初めて真人は、同級生の多くが学校見学に参加していることに気づいた。
- エ ハイスクールの生徒の劇をみて感動した真人は、自分も同じ舞台に立ちたいと初めて思った。
- オ キャンベル先生の友だちのオキーフ先生は、もじもじしていた真人を快く迎え入れてくれた。